

恋の種を蒔まきましょう！

ラウンド1

四月最後の月曜日、ファームから見える空は晴れわたっていた。春の終わりは近く、畑を囲む桜のほとんどは花が散り、緑の葉が勢いよく伸びている。例外は、クラブハウスと呼ばれる建物の手前。畑との通路脇に立つ一本だけ、まだ桜が咲いている。見上げると、どこまでも広がるさわやかな空のブルーに、桜のピンクと緑がよく映えている。いつまでも見ていたくなる鮮やかさ。

でも残念ながらそれどころじゃない。もうお昼時だ。作業を急がせなければ。

万屋^{よろずや}妃菜^{ひいな}は子どもたちに声をかけた。

「はいはいはい、みんな聞いてー」

子どもたちは、四区画にわかれた十二畳ほどの広さの畑に散らばっている。妃菜はその真ん中から叫んでいるのだが、注意を引くのはむずかしい。子どもたちが遊んでいる様子は、春先に土から出てきたもぐらそっくり。放っておくと、いつまでも穴を掘り続けていそうだ。

「こっちを見て。聞いてっば、ほらほらほら」

子どもたちは妃菜がパンパンと手を叩いた音で、ようやく顔を上げる。

「みんな、先生に種をもらったかな？ 掘った穴のひとつに五、六粒^ま蒔いてください。そのあと、

上から土をかぶせてね。しつかり、でも押しつけすぎないで」

妃菜の説明を聞いて、もぐら、じゃなくて子どもたちが一斉に「ひとりつ、ふたーつ」「さーん、しい」と手のひらにのせた種を数え始めた。「みつっー、ひとつー」と数をループする子や、片手の指より先が数えられない子もいる。

まあいい。先生達もついているし、心配ないだろう。

数え方だけでなく、種の蒔き方もそれぞれだ。指で穴を広げて蒔く子、慎重に土をかぶせる子に、ばんぼんと土を固める子もいる。

個性豊かな種蒔きを眺めながら、妃菜は束の間、息をついた。

見渡す限り広がつているのは、レンタルファーム。貸し農園だ。

その名の通り農地——畑を貸し出しているのだが、このファームはそれだけではない。種苗の購入や農具の貸し出しがファーム内でできるので、農作業の準備はほとんどいらぬのだ。さらに、農作業の経験があまりない人のために、従業員がサポートを行っている。なかなかファームに来ることのできない人向けの、日々の世話を代行するサービスもあり、至れり尽くせりだ。

アルバイトの研修でさんざん叩きこまれた宣伝文句が、口をついて出る。

「私どもの目的は、都会に住む人たちに土に触れる機会を提供し、花や野菜を育てる喜びを経験していただくことです、つてね」

ここ花森市は、いわゆるベッドタウンで発展途上の街。都心へのアクセスがそれなりに便利で、人口は増加している。会社の狙いもそこにあるのだろう。

見回すと、月曜日にもかかわらず、若い人や家族連れが多い。シニア世代もいる。畑の新規契約の勧誘は順調らしかった。

このレンタルファームを経営する会社の名前は『シーズ・イン・ライフ』。『シーズ』とは『seeds』で種のことだ。

人生に種を蒔こう、という意味が込められているらしい。

なかなか深い社名だ。うん。

春休み前にオープンしたばかりの『シーズ・イン・花森』で、妃菜はバイトとして働いている。

ゴールデンウィークまでが、新規契約のかき入れ時。契約した当日に植え付けをする人も多く、スタツフは毎日、目が回るほど忙しい。妃菜が指導している子どもたちは、歴としたお客様だ。彼らは『めぐみ保育園』の園児で、週に三回、先生の引率でやってきて作業する。どの子も元気いっぱいだから、相手をする妃菜も楽しい。パワーはいるけれど。

種を蒔き終えた子が増えてきたのを見て、妃菜は声をかける。

「はいはいはい、種蒔きができたら、じょうろでたっぷりお水をあげてね」

子どもたちが歓声を上げた。じょうろをつかんだ子が何人か、手洗い場に走っていく。妃菜と同年代に見える女の先生が、汗を拭いて腰を叩きながら言う。

「ああ、きつい。農作業ってやっぱり大変ですな」

「最初は誰でもそうですよ。慣れると違ってきます」

「そうですかね。まあ私はともかく、子どもたちはみんな楽しみにしているんですよ。ここでエネ

ルギーを発散してくれると、ありがたいわ」

「園に帰ったらぐっすりお昼寝してくれますよ、きっと」

その時、じょうろを持った子どもたちが先生を呼んだ。

「先生、水やろうよ」

「はいはい、今行くわ。すみません」

「道具を片づける場所はわかりますね」

確認すると、先生は笑顔でうなづく。これで妃菜の作業も終わりだ。自分の使った道具を農具置き場に戻して、手洗い場で手を洗う。妃菜が振り返ると、畑で子どもたちが真剣に水をやっているのが見えた。ちよつと勢いがよすぎる。

「ドボドボドボって感じね。種が潮しほれちゃうかも」

種がすべて流れてしまっていないか、あとで見直しておこうと思った。

溺死でいきをまぬかれた種は、来週には発芽するだろう。子どもたちはまた大喜びするに違いない。彼らは毎週月曜日、水曜日、金曜日と来てくれるから、種も育ち甲斐いがあるというものだ。

空に向かって伸びをすると、背中が痛かった。実家を離れて畑仕事からも遠ざかっていたので、妃菜にとつても連日のように農作業をするなんて何年かぶりのことだ。

「それにしてもいいお天気ね。お父さんたち、忙しいだろうな」

ファームにいると、よく家族を思い出す。妃菜が生まれ育ったのは関東近郊の田舎いなかだ。野菜農家で三世代七人家族。幼い頃は普通の家庭だと思っていたが、最近では珍しい大家族といえる。

祖父母はともに八十近い。気むずかしい祖父と大らかな祖母は、正反対の性格だからこそぴったりにくるようだ。

父は背が低いものの、がっしりした体格をしている。日焼けた笑顔は愛嬌あいきょうたっぷり。家族と野菜を心から愛している。母はというと、長靴に麦わら帽子、スモックの野良着のらぎでも隠せないほどの美人だ。大切なことは見落とさない目と賢い頭、辛辣しんらつな舌したを持ち、家族は誰も彼女に逆らえない。

二つ下の弟は野菜作りが好きで、農業高校を卒業してからは両親と畑に出ている。末っ子の妹は陶器あひら作りに憧れ、土地の陶芸家とぎげいに住みこみで弟子入りしてみんなを驚かせた。性格はまったく違ふきようだが、夢に向かってまっしぐらなところは似ている。そう言ったのは母だったと思う。

そんなきよだいの長女である妃菜の夢は、野菜の美味おいしさを伝えられるコックになること。

妃菜は小さな頃から野菜が大好きだ。家で作る野菜はどれも美味しく、好き嫌いなどない。

だから、小学校に入って給食の時間に聞いた同級生の言葉が、信じられなかった。

『人参にんじんきらい』

『ピーマン、まっすいよねー』

まっすい？ どうして？ 野菜はどれも、あんなにきれいで美味しいのに。

『美味しいよ』

妃菜は言い張る。

『まっすいもん』

『美味しいから食べて』

『まずいから食べない』

些細な口論の果てに、つかみ合いの喧嘩をしたこともある。穏やかな性格で日頃は言い争いもしない子だったのにと、昔話になるといつも父は笑う。

『妃菜ときたら、口をへの字にして目に涙を浮かべているのに、謝ろうとしなくてさ。ピーマンはぜーったい美味しいもんって意地張ってた』

当時は妃菜を叱った父だけれど、実は娘の主張が嬉しかったのかもしれない。

妃菜が野菜全般、特にピーマンに対して、強烈な愛情を抱くようになったのは、あれからだ。ずっと昔のことなのに、思い出すとつい、つぶやいてしまう。

「だって、絶対絶対絶対、美味しいもの」

野菜の美味しさを知らない人がいるのは、もったいない。

長女の妃菜は、忙しい両親に代わって食事の支度をすることが多かった。妃菜の作る料理——中でも野菜料理を、家族は美味しいとほめてくれる。そのうちに、たくさんの人に野菜の美味しさを伝えたいと思うようになった。

コックになろう。そう心に決めた妃菜は、高校を卒業すると、都内の調理師専門学校に進むために実家を出た。通学に便利だった花森市でひとり暮らしを始め、朝から晩まで実習に明け暮れる毎日。なんとか調理師免許を取り専門学校を卒業して、ホテルの厨房に就職した。目が回るほど忙しい職場で、よくも悪くも仕事のいろはを学べたと思う。

三年勤めたあと、規模の大きな職場は性に合わないと感じて、下町に昔からある小さなレストランに転職した。いずれ自分の店を持つという夢のため、経験を積みたかったからだ。「まさか一年も経たないで潰れるなんてね」

思わずこぼしたつぶやきは、毒のように苦い。

半年ほど前、近くに大型ショッピングセンターができた。そのレストラン街にいくつも入った人気チェーン店の影響が大きく、店を畳むことになったのだ。

すまないと詫びるオーナーの声は、今も耳に残っている。

そして妃菜の三度目の就活は、思うようにいかなかった。

かろうじて見つけたコックの仕事は、花森市にあるビストロでのランチタイムパート。火曜日、金曜日、土曜日と、週に三日だけだ。生活のためには、ほかにもバイトをかけたほうがいい。そこで妃菜は、日曜日、月曜日、水曜日の三日間、このファームで働くことにした。

洗ったばかりの少し冷たい手で頬をはたき、意識を引き戻すと、自分に言い聞かせる。

「意志と忍耐力よ。そうでしょ」

久しぶりに畑に立ち、思い出すことができた。種や苗が育って花が咲き、実になるまで、かかる手間と時間は膨大だ。でも、それだけの価値がある。大切なのは前に進む意志と、結果が出るまでの忍耐力。大変だからこそ、収穫の喜びは大きい。

仕事だって同じだ。今は駄目でも、たゆみなく努力すればいい方向に向かうはず。妃菜はそう自分を励ましていく。

けれど現状が厳しいことには変わらない。

「運なし金なし、愛もなし？ やだやだやだ」

情けないひとり言が口をついて、心の中で自分を叱った。今は彼氏を探す気力も機会もないくせに。恋愛が畑に落ちていればいいんだけど。それが大好きなピーマンに詰まっていたら、妃菜にとってはもつといい。

周囲を見渡しても、ファームにやってくる若い男性はたいてい彼女と一緒にだし、ひとり身の男性は年輩ばかり。ファームのスタッフには女性が多くて、みんな男性客に対して常にアンテナを張っているところがある。そうはなりたくないと思うが、本音も出る。

「そりゃあ、彼氏は欲しいよね」

そんなことを言っても、相手がいらないんだから仕方がない。気を取り直してお昼にしよう。

手洗い場から区画を抜けて通路に出ると、妃菜は事務所へ向かった。

事務所は幹線道路に面して建てられたクラブハウスの中にある。広い畑のどこからでも見える白い建物には、事務所のほかにスタッフルーム、契約者用のロッカーやシャワー室、喫茶室もある。

すぐそばに立つ桜の木は、畑の周囲のソメイヨシノとは違う品種らしく、今が見頃だ。

妃菜がちょうど桜の木のままで来た時だった。

クラブハウスからこっちへ歩いてくる男性を見て、足が止まる。

「うっそ。うわうわうわ」

彼は背が高かった。細身のがつしりした体に、スーツとネクタイがびしっと決まっている。つややかな黒髪の手先は、額や襟足で丸まっていて柔らかそう。額が広くて顎が尖った逆三角形の顔に、

吊り気味の目は凛々しい。

男性に疎い妃菜でも認める、滅多にいないイケメン。ふらふらと引き寄せられそうだ。

「待って待って、こちら私」

ひとり言でなんとか自分を押しとどめたのは、ほかの女性スタッフの目が怖いのと、彼の姿に違和感を覚えたから。TPOを考えたら、妙だ。畑にスーツ姿、足元は革靴？ おかしい。

妃菜の装いは、当然だが畑にふさわしいものだ。クリーム色の長袖Tシャツにブラックジーンズ。ミントグリーンのエプロンとキャップは、『シーズ・イン・花森』のロゴ入りユニフォーム。ダークグリーンのパーカーを羽織り、黄色の長靴を履いている。見るからに農作業向きの服装で、農業をする女子——農ガールそのものだろう。

それに比べると、彼の格好は場違いで目立ちすぎている。もしかしたら、ファームの客ではなく肥料や種苗のセールスマンなのかもしれない。

それにしてもイケメンだ。

畑にいる家族連れのお母さんや、カップルの女性客も、さりげなく彼を振り返っている。

しかし彼はそんな視線を気に留めず、数メートル先の妃菜に声をかけてきた。

「このスタッフかい？ 聞きたいことがあるんだが」

妃菜のエプロンとキャップに気づいて、スタッフだと思ったのだろう。彼の口ぶりからして、セールスマンじゃなさそうだ。愛想のない言い方なのに、目が合っただけ胸がときめいてしまった。悔しいので少し気取ってみる。

「何のご用でしょうか、ただいまそちらに……」

「僕が行くよ。動くな」

命令口調にむっとした。マニュアル通り自分から駆けつけようとしたのだが、足を止めて彼を待つ。

いつでも種蒔きや苗付けができるようにと、ファームの空いている区画には鍬を入れて肥料を足してある。あぜ道にも土を盛っている。彼はそこを、ピカピカの革靴で蹴散らすように歩く。あたりを見回す目つきは、まるで領土を監視する王様だ。

偉そうなのに、魅力的だ。自信にあふれていて惹きつけられる。

でも警戒心が働き、惹きつけられたくもないと思う。

彼を待つうちに、妃菜の笑みは引きつってくる。頭の中にはだめだめだめと、警告が響いていた。

ラウンド 2

近くで見れば見るほど、彼はイケメンだった。でも、態度は横柄だ。

「レンタル希望だ。畑を見学したい。ついでに詳しい説明もしてくれ」

ムツとしても、相手はお客様だ。

妃菜はすぐに案内と説明を始めた。

「畑の広さは五ヘクタールから二十ヘクタールまで選ぶことができますよ。五ヘクタールで豊三枚程度と想像していただければ。農機具や種や苗、肥料もこちらで用意しますので、ご心配は無用です。お望みであればスタッフが指導、補助もいたします。季節ごとにイベントも企画中です」

『シーズ・イン・花森』のセールスポイントを説明しつつ、妃菜の中では失望が大きくなっていた。レンタル希望と言ったくせに、彼は畑に興味がありそうには見えなかったからだ。

やたらと周囲に目をやり、足下の土を気にしている。手にはスマホを握りっぱなし。時折うるさそうに額のくせっ毛を払い、すれ違う客を振り返って、妃菜の説明には生返事だ。

この人が畑を借りる？ 信じられないわ。

それでも仕事だからと、努めてにこやかに説明を続ける。

「オプションでサポートサービスもございます。畑には少なくとも週に一度の世話が必要ですが、意欲があっても時間のない方や、不測の事態に備えてのサービスです。料金は多少高くなりますが、お客様の代わりにスタッフが畑をお世話します」

「そういうサービスがあると助かる。仕事が忙しくて、そうそう来られないと思うんだ」

彼の口調で「来られない」のでなく「来たくない」のだと思い、妃菜は眉を吊り上げそうになった。彼の声や態度からは、作物や農作業への関心が一向に伝わってこない。この客が畑を借りたら、スタッフに世話を任せっぱなしにするだろう。百万円賭けてもいいくらいだ。

いやいやいや、百万円なんて持ってないけれど。

あつたら賭けたりしないで、自分のレストランを持つ夢の準備資金にするわ。

とにかく妃菜には、彼が畑仕事をしたがっているとは思えなかった。なのになんかどういいうわけか、彼は畑を借りる気だけは満々みたい。謎だ。

「お客様、これまで野菜を育てたご経験は」

「まったくない」

言い切られて、絶句する。

「だから一番小さい区画をサポート付きで頼みたい」

「今日、お申し込みですか」

「もちろん。何度も来るのは時間の無駄だ」

迷いのない口調だった。引つかかるところは山ほどあったが、ただのバイトである妃菜は、彼の望み通りに手続きを進めるしかない。言いたいことをすべて胸に押し留めて、クラブハウス内の事務所へ彼を案内した。

テーブルに座り書類を手にした彼は、仕事のできるビジネスマンといった雰囲気だ。

「一年？ 年間契約しかないのか？」

「ご不満でしょうか」

「そこまで続けられるか、わからないじゃないか」

「でしたら、トライアル用の半年契約もあります。でも、かなり割高ですよ」

「かまわない。あるなら最初から言ってくれ」

やれやれと妃菜は思う。ここへ契約に来る客が持っているはずの畑への興味や熱意が、やはり畑

にはなさそうだ。なら、どうして借りるんだろう。

その一方で彼は契約書を丹念に読み、疑問点を質すことには熱心だった。中でもサポートサービスについては念入りで、それが妃菜をさらに警戒させる。

「スタッフは利用時間中なら必ず常駐しております。わからないことはその都度尋ねてくださいね。お答えしますし、必要な時だけお世話する代行サービスも……」

「いや、最初からサポートをつけてくれ。ここへ来なくても、世話をしてもらえたらどう？」

これは甘い顔ばかりしていられないと、妃菜は態度を改めた。

「ですが、来ないことを前提に契約されるのは、困ります」

思わず強く睨んでしまう。この顔、見るだけならほんとうに格好いいのに。

「お忙しくて、週に一度は世話をしに……」

「それができない場合を見込んで、サポートをつけるんだろう？」

「確かにそうですね」

「植えるのもやってもらえるのかい？」

「ご希望の種類はなんですか」

「何だっさいい」

呆れた妃菜はどうとう口を閉じ、非難を込めて彼の目をじっと見た。さすがにまずいと思ったのか、視線をそらした彼は口元を手で覆い、もごもごと言う。

「僕は忙しいんだ」

免罪符みたいな言い方にカチンときた。だったら借りなければいいと、のど元まで出かかったが、さすがにそれは言えない。そのかわりに決心した。

「今、お時間ありますか」

「何？」

「このあと野菜を選んで植え付けましょう。ご本人にしていたいただくのが決まりですし」

相手は思いきり渋面じゆうめんになったが、かまうものか。そのまま続ける。

「契約してくだされば、すぐに植えられます。後日、代金をお振り込みいただいて完了です。もちろんクレジットカードもご利用いただけます。契約なさるんですよね？」

「あ、ああ」

「でしたら是非、すぐに、さっさとやりましょう」

今まで新規の客に対して、こんな風に急かしたり迫せまったりしたことはない。でもそれを言うなら、こんな風に最初から逃げ腰の客もいなかった。眉間に縦じわを寄せて、彼が妃菜を見ている。

「……君、強引だと言われないか」

「いいえ、一度も」

「信じられないな。わかったよ、やろう」

小さな勝利をもぎとった。おかげで妃菜は、彼が契約書に記入するのを心穏やかに見守っていた。クレジットカードを処理する間、書類にくっきりと押された印鑑と名前を確かめる。

百瀬ももせ育生いくお。

それが彼の名前らしい。育てて生かす、ね。名前だけなら畑にびつたりだと、書類をファイルにしまいながら苦々しく思う。

「ご契約ありがとうございます、百瀬さま。ではさっそく、当ファームでご用意できる種しゅむ苗びょうをご案内しますね」

ファイルを片づけると妃菜は立ち上がり、百瀬もあとに続いた。

「君の名前は？」

歩き出したところで名前を聞かれて、ドキッとした。軽く会えい積せきをしながら答える。

「万屋と申します」

「万屋くんか。覚えておこう」

吊り上がり気味の目で睨にらまれる。

ドキッとした自分がバカみたいだ。つんと肩をそびやかして廊下を歩く。彼への腹立たしさを何とかまぎらわさなくては。

種苗をそろえた部屋に入ると、空調が効いているはずなのに、種や苗、土の匂いと人の呼吸でむわつとした空気が充満していた。販売用のコーナーには数人の客がいて、スタッフと話をしている。妃菜は植え付け用の種苗コーナーに百瀬を案内し、説明する。

「うちでは、初心者向けの野菜をたくさんそろえています。苗はスタッフが種から大事に育てていて、植え付けにちょうどいい時期のものばかりですよ。すぐに育って収穫できるようになる苗ばかり。種も種類が豊富です」

「ほんとうに何でもいいんだ。なるべく手がからなくて、ちゃんと収穫できるものがいい。種？ 面倒くさそうだ、苗にしよう」

数と種類に圧倒されたようで、種苗を目の前にしても彼は手も出さない。

「ミニトマトやきゅうり、ナスが定番です。とうがらし類も育てやすいですよ、たとえばピーマンとか」

何気なく口にした言葉だったが、返ってきた声音は普通じゃなかった。

「ひ、い、ま、ん？」

思わず彼を見てしまうほど奇妙で大きな声。レジに向かっていた客とスタッフも百瀬を見るが、彼は妃菜を睨みつけている。地雷でも踏んだような形相で。

部屋がシンとする。

なにになにに、どうして？ 私、何かした？

「却下だ」

「は？」

「あり得ない」

「えっと」

「何を好き好んで、金を払ってまで、ピーマンを育てなきゃならない？」

「……ピーマンの何がいけないっていうの！」

ほかの客がぎよつとしたのにも、販売スタッフが部屋を抜け出したのにも、妃菜は気づかなかつ

た。自分はバイトで、彼は客だということすら、頭からふっ飛んでいた。小学校での喧嘩以来、

ピーマンは妃菜にとつて唯一の起爆剤。百瀬はそれに火をつけ、爆発させてしまったのだ。

「ピーマンは生でも炒めても美味しく食べられて、栄養価も高い立派な野菜よ。初心者でも育てやすいし、一定の収穫量も見込めるの。すぐきれいな緑色で彩りもばつぐんで」

まさか食ってかかられるとは思っていなかったのだろう、百瀬はぼかんと口を開けている。まぬけな顔だが笑えない。妃菜にそんな余裕はないのだ。

「ピーマンをそんな風に言わないで！」

「僕は、ピーマンが、大っ嫌いなんだ！」

言われっぱなしのはずもなく、百瀬はあつさり反撃に転じた。

「自分が借りた畑に、わざわざ嫌いな野菜を植える奴がいるか？ それともここは、客に植える野菜を強制するのか？」

彼の迫力に、さすがの妃菜もたじろぐ。

「そんなつもりは」

「ならどういうつもりなんだ」

「だって」

「そもそも野菜なんか、ジャガイモかトマトがあれば事足りる。ピーマンなど論外だ！」

消えかけていた妃菜の怒りの火に、また油が注がれた。野菜なんか？ ピーマンは論外ですって？ 堪忍袋の緒がメラメラと焼き切れていく。出せる限りの大音量で、妃菜は怒鳴った。

「ピーマンに罪はないわ！ あなたこそ論外よ！」

「つみ、だあ？」

ふたりではったと睨み合うこと、しばし。

じわじわと妃菜の理性が戻ってくる。

そこに、スタップチーフの秋葉が真っ青な顔で部屋に飛びこんできた。

妃菜は焦る。秋葉チーフは接客のプロだが、野菜や農作業には興味がない。

つまり、目の前の人と同類だ。

「おっ、お客様、何か不手際がございましたか？ 彼女が失礼を」

「失礼もへつたくれもあるか。もういい、契約は取り消しだ！」

妃菜の頭の上つていた血がザツと、音が聞こえるほど一気に引いた。今の妃菜の顔は秋葉チーフと同じ、真っ青に違いない。やばい、まずいやばい。狼狽の音がエンドレスで頭に響く。

もしかして私、やっちゃった？

自分を睨みつけてくる百瀬の顔つきが、答えた。

「畑は解約だ。手続きを頼む」

「あ、あの」

「とんでもないところだな、まったく」

「お待ちください、スタップの失礼はお詫びを」

「ピーマンの詫びなんかいるか」

「ピーマン？ ですか？」

秋葉チーフが、男にしては長いまつげをパタパタさせる。それを見るたびに妃菜は苛立つのだが、今はそれどころじゃない。大声で叫ぶのは、今度は百瀬の番だった。

「ピーマンを愛して、擁護して主張する。彼女は僕の大嫌いなピーマンそのものだ！」

妃菜を指さして怒鳴りつけると、百瀬は大腿で去っていった。そのあとを秋葉チーフが必死で追いかけて、すがっている。

「お客様、お待ちください、お客様あー」

残された妃菜は呆然とその場に立ちつくし、両手を握りしめた。

何てことをしてしまったんだろう。

『僕の大嫌いなピーマンそのものだ！』

彼の声がこだまする。頭が割れるように痛み、恐れが湧き上がってくる。

クビにされたらどうしよう。それだけは勘弁してほしい。

短気なんて滅多に起こさないのに、どうして今日に限って？

妃菜は今にも倒れてしまいそうだった。

百瀬育生はレンタルファームをあとにしながら、昼休憩を無駄にしたと怒っていた。そうさせたピーマンガールについては、思い出したくもない。

もともと野菜は嫌いだ。食べられないわけではないが、食べたいと思わない。肉と野菜と魚、何を食べるか選べと言われたら、まず肉だ。次に魚。野菜はないほうがいいとまで思っている。

野菜サラダなんて、育生にとつてあり得ないメニューだ。美味くもなければ腹にも溜まらず、何の足しにもならない。ビタミン？ カロチン？ そんなのサプリメントで摂れば充分だ。何粒かですべてを補える。野菜を食べなくてもどうにかなる。

中でもピーマンは、嫌いな野菜の筆頭だった。不可思議な形に苦みの強い味。絵の具を塗ったような色まで、この世にあるのが間違いないかと思える。

そんな自分がレンタルファームにやってきた理由も、野菜と畑にあった。皮肉な話だ。

育生は三十五歳。自ら立ち上げた不動産売買の会社『百育不動産』を経営して五年になる。

そこに至るまでの道のりは楽ではなかった。育生はずっと起業を目標としてきた。大学在学中に宅地建物取引主任者の資格を取り、卒業すると都内の大手不動産会社に就職して、実務経験を積みながら独立の準備をした。

開業時に選んだ場所は、幼い頃に住んでいた花森市だ。若い世代や高齢者への公的支援が厚く、人口は増加を続けている。市の中心地は活気に溢れていて、郊外はまだまだ畑などの空いた土地が多く、開発の余地もある。ここでなら、自分の使命が果たせるかもしれない。使命などと言うと大げさだが、育生には畑を住宅地に変えたいという欲求があったのだ。

そして育生は、花森市の出身で職場の先輩だった熊谷を誘い、さらに事務員を雇って、『百育不動産』をスタートさせた。五年間、骨身を惜しまずに働いたおかげで、会社は軌道に乗りつつある。集めた情報をもとに土地を総合的に評価し、適正に判断し、交渉する。どれも育生の得意分野で、仕事はおもしろかった。特に目立つことや大きな仕事を狙うのではなく、物件に見合った公正な売買を心がけるようにしている。

今では育生や、育生の会社を指名する顧客も増えた。興味深い噂や物件があると、声をかけてもられるような人脈も作り上げている。

もちろん待つてばかりではない。花森市に広がる緑地や畑を、暇を縫ってあちこち見て回り、仕事に結びつかないか目を光らせている。

その畑を見つけたのは、つい最近のことだ。

「この辺はあまり来ていなかったな」

育生の事務所と駅を挟んで反対側の地域は、開発の手がおよんでいない広い田畑や昔ながらの農

家が多い。開業して五年になるのに、あまりチェックしていなかったのが不思議だ。

片側三車線の国道を車で走っていた育生だが、何気なくその風景が引つかかって、二度見した。ただ通り過ぎることができず、周囲を確かめながら路肩に車を停める。

「ここは」

見る限りは、普通の畑だった。もうじき何か植えるのだろうか、耕された土が黒々と広がっている。横手には、奥の小高い山へと細い道が続いていた。

古びた石の鳥居が立っているから、鎮守の森でもあるのだろうか。畑と鳥居と森がひとつの風景になっている。

どこかで見たことがあると思っただが、そんなはずはないと首を振った。

いずれにせよ、育生を引き寄せる強烈な引力がある。

ここは畑のままじゃいけない。畑じゃだめなんだ。

駅からそう遠くないのに、自然に囲まれていてロケーションがいい。ここなら、市が計画している緑地を含んだ集団住宅の候補にできる。

育生の決心は早かった。

事務所に戻るや否や熊谷を呼んで、地図を広げた。目印にしていた鳥居の先には、花森神社と記してある。

「花森神社のそばなら、昔からの土地持ちが集まるところだね。こういう時は樁さんだ」

熊谷がそう言ったところで、事務員の津田樁がちょうどコーヒーを持ってきた。彼女は『百育不

動産』の経理事務担当で、五十を越えたばかりの、いかにもお母さん風の女性だ。

開業前、経理経験のある主婦だった彼女を見つけてきたのは、熊谷だった。子どもの手が離れた当初はパートだったが、今では正社員として調査業務までこなす。何といっても地元で生まれ育った、彼女の顔の広さがあるがたい。

さっそく尋ねると、ふたりの横から地図をのぞきこみ、あっさり言った。

「花森神社のあたりなら一倉さんちでしょ」

「一倉、そうか。そうだな」

熊谷がうなずく。

一方の育生は黙っていた。

一倉という名前に心当たりがありすぎて、言葉が出なかったのだ。

そんな育生の様子には気づかず、樁は続ける。

「一倉さんはいわゆる地元の名士です。古くからの庄屋で、土地持ち。家長の伸之助さんが土地売買に長けた人で、さらに家を大きくしたそうですよ。高度成長期の公共事業には、必ず絡んでいたとか。市長にまでなった人ですから」

「確か、六十越えてすぐ隠居したんだよね」

熊谷が記憶を掘り起こしている。

「そうそう。事業は全部長男に譲って、引き際の見事なところも語り種になってね。そのあとは奥さんと悠々自適の生活。そろそろ八十だけど、かくしゃくとしてるとか」

「さすが。詳しいね、椿さん」

「一倉さんのことなら、長く住んでいればみんな知ってますって。長男が跡を継いで、次男は養子に出られて」

熊谷がそこで首を傾げた。

「もうひとりいなかったっけ？ 娘さんが」

すると、椿は気の毒そうな表情を浮かべる。

「いらしたんですけどね。ご結婚されたあと、事故で亡くなられたって……ボス、どうかされました？」

戸惑いが顔に出ていたようだ。椿が育生の顔をのぞきこみ、熊谷も怪訝そうに見ている。迷ったけれど、隠すもおかしい。仕事にするつもりなら、なおさらだ。仕方なく育生は告げた。

「母なんだ」

ふたりともきよんとしていた。話が繋がらないらしい。それもそうかと、育生は言葉を足した。

「今、話していた娘というのが、僕の母だ」

ふたりの視線が痛い。

叫んだのは椿が先だった。

「え？ ええ？ あのお嬢さんが、ボスのお母さん？」

「なになに、てことはつまり育生くんは」

「一倉の外孫に当たります」

「ええー？」

「ほおー？」

いい歳をしたふたりが滅多に出さない大声で叫ぶ。育生も一緒に叫びたいほどだったが、それじゃ收拾がつかなくなりそうだ。思いもよらぬ展開に当惑しているのは、育生も同じだった。

かつて育生は、この街に両親と住んでいた。母は育生が物心つくかつかないかの頃に、交通事故で亡くなっている。事故現場にいたはずなのに、育生はその時のことを覚えていない。それでよかったのかもしれない。

覚えているのは葬式だけだ。若い母親の突然の死に父は黙りこくり、周りも陰鬱な顔ばかりだった。そこに祖父母が現れた。父と激しく言い合う祖父を見て、育生を襲った恐怖。育生は闇雲に暴れてわめき、気を失った。

そのあと、父と花森市から電車で二時間かかる都内の街に引っ越して以来、祖父母には会っていない。ここ花森市に事務所を構えた時にも、迷いはしたものの連絡をとらなかつた。だが、仕事となれば別だ。逃げるつもりはない。

決心した育生は、さっそくアポイントメントを取った。そうして、四月終わりの日曜日に一倉——祖父母の家へと向かった。

一倉の家は、想像していたよりも立派だった。威厳のある門をくぐると、庭は奥へ行くほど広がっていて、その先には畑も見える。広い敷地に平屋建てというのが、贅沢だと思う。

昔、来たことがあったのかもしれないが、よく覚えていない。

けれど、通された応接室で対面した祖父母の顔には、見覚えがあった。およそ三十年ぶりだった
が、想像していたほど歳を取っては見えない。

育生の正面には、ひとり掛けのソファがふたつ並んでいる。祖父母はそれぞれそこに姿勢よく
座って、じつと育生を見つめてきた。

「ご無沙汰しています。育生です」

「うむ」

「まあまあ、よく来てくれたわねえ」

祖母の志乃は、真つ白な髪をシニヨンに結っている。まなざしはいきいきとじていて、温かい。
祖父の伸之助は磨かれたようにつるりとした頭で、髪は耳の周りにもしゅもしゅ残るだけ。ぎよ
ろりとした鋭い目は、とても仕事を引退した老人には見えなかった。

髪と同じもじゅもじゅの眉毛の下の目を光らせ、久しぶりに会う孫を十二分に吟味したあとで、
伸之助は志乃に言った。

「昔の面影はないな。可愛い子だったが」

「そんなことありませんよ。目が芹にそっくり」

志乃の声は柔らかく優しくかった。母の名前を耳にするのも、久しぶりだ。ふふんと鼻を鳴らした
伸之助は、作業衣に包まれた腕を組んでソファの背にもたれた。

「驚いたぞ、育生。おまえから連絡をもらうとは思わなかった。花森市で仕事をしているのは知っ
ておったが」

「ご存じだったんですか」

「不動産の会社を興したそうだな。五年前だったか」

驚かせるつもりが驚かされてしまった。およそ三十年間も疎遠だったというのに、自分の動向を
知っていたようとは。

志乃が言い足す。

「気にしていたのよ、ずっと。こうして会えて……嬉しいわ」

口元を押さえて志乃は横を向く。育生も言葉が見つからない。

伸之助の厳しい声に促されて、逆に救われた。

「仕事の話がしたいそうじゃが」

「はい。花森神社の前の畑は、こちらの土地かどうかはわかりました」

伸之助と志乃が目を見合わせた。どういうことかわからないが、とにかく説明が先だ。

「市の人口は増加の一途をたどっていて、住宅供給は現在も市の必須課題です。あのあたりは駅か
らも遠くない上に環境もいい。家族向けの住宅地にうってつけじゃないですか。是非、僕に任せ
てほしいんです」

育生の熱弁を黙って聞いていた伸之助が口を開いた。

「おまえ、野菜は食べとるか」

まさかそんなことを聞かれるとは思わなかった。

「食べられなくはない、です」

「食べたくもなさそうじゃな。芹が聞いたら嘆くろう」

意味はわからないものの、腹が立った。とつくに死んだ母だ。自分が野菜を食べないからって嘆くわけがないじゃないか。育生の気持ちをやよに、伸之助はまた話を飛ばした。

「知っておるかもしれないが、うちの土地はあちこちにある。別にあそこにこだわることもなからう。おまえの希望に添いそうな土地はほかにもあるぞ。そっちにせんか」

気を引かれないわけではないが、育生の心には頑として動かぬものがあつた。それが何なのかは、自分でもわからない。気がつく、育生は口を開いていた。

「駄目です」

「何が」

「すみません、どうしても」

言いかけて、伸之助に睨まれる。

まるで駄々をこねる子どもみたいだが、頭に浮かんでくるのは、森と鳥居の前のあの畑なのだ。この欲求をどう言えばわかってもらえるだろう。うまく説明できない。

「どうしてもあそこが欲しいんです。あそこを、畑にしておくわけにはいかない」

育生を見つめていた伸之助は腰を上げ、縁側に立った。育生よりもずっと小柄なのに、こちらに向けられた背中が大きく見える。ゆるみのない確かな体つきだ。今も畑仕事をしているのだろう。

「あの土地はもともと、芹に譲るつもりじゃった」

ぼつりと言われたのは、意外な言葉だった。

「母に、ですか」

「おまえに譲ってもいいが、あそこはいい畑だ。住宅地にするのは不本意じゃな。おまえの意志がどれほどのものか、見極めるために条件をつけさせてもらおう」

「あなた」

志乃がたしなめるように伸之助を呼ぶ。

「条件？ 価格ですか」

振り返った伸之助の目は、育生を嘲るようだった。

「金には困つたらん」

「だったらどんな」

鬼が出るか蛇が出るか、どんな無理難題を言われるのかと身構える。

「おまえ、つきあつとる女性はおらんのか」

「……はい？」

「そうよ、結婚の予定はないの？」

志乃まで食いついてきて、当惑する。

「いえ、まったく」

「まったく？ 情けない」

「芹に似てハンサムなのにねえ」

「ありが……じゃなくて、すみません」

礼を言うのもおかしいが、謝るのも変な気がする。

理不尽だけれど、志乃があまりにも残念そうなので、罪悪感まで抱いてしまった。そんな中、伸之助が続けた言葉で、さらに理不尽さが増す。

「よし。おまえが結婚したいと思う女性を見つけて、連れてこい」

「は？」

「野菜と、おまえを愛する女性だ。おまえにふさわしい相手だと、わしらが認めるような」

「はあ？」

驚きすぎて言葉も出ない。

何しろ伸之助は高齢だ。頭がおかしくなったとも考えられるけど——まさかな。

「あそこはわしらにとつても思い入れのある土地じゃ。手放すならそれ相応の意味が欲しい」

「それがどうして僕の相手の話になるんです」

「どうしてもだ。嫌ならこの話はなし、じゃな」

「あなたったら」

「わしの土地をわしがどうしようかと、勝手じゃろ？」

伸之助が仁王立ちで育生を見据えてくる。

本気らしかった。無茶苦茶で理不尽だが、困ったことに育生の経験上、商売にはこういうことが多い。人はもともと、そういう生き物なのだろうか。

「どうする？ やめるか」

育生は迷った。だが、あの土地への欲求は大きい。

「わかりました。野菜と僕を愛する女性ですね」

「ごまかすなよ、ちゃんとわしらにも会わせてもらうからな」

「育生さん、いいの？」

「そうそう見つからんじゃろ、やめたほうがいいんじゃないか？」

にやにや挑発する伸之助と心配そうな志乃を見比べて、育生は腹を決めた。

このくそじじい、今に見てるよ。

「やりますよ、やるに決まってる。認めさせたら、その時は」

「ああ。あの土地は好きにするといい」

そう伸之助と約束を交わして一倉の家をあとにしたものの、自室に戻った育生は途方に暮れた。

「必要なのは奇跡かマジックだな」

つきあっている女性がいなのは、ほんとうだ。独立開業してからは仕事に夢中で、そんな意欲も時間もなかった。それ以前も、恋愛にのめりこんだことはない。

母の死後、父はより仕事に没頭するようになり、育生の世話は家政婦に任せきりだった。特にそれを寂しいとも思わず、そういうものとして育った。学生時代は将来設計に、就職してからはその実現に日々を捧げ、振り返ってみると仕事以外の人間関係は存在しないくらいだ。

そんな自分に、女性を——しかも『野菜と自分を愛する』女性を見つけてこいとは。

「空中から女性を出すマジックを習わなきゃならないってことか。いや、お見合いつて手もあるな。

野菜を愛する人つてのを、条件にしてもらわないと」

ぶつぶつ言いながらパソコンであてもなく見合いの検索をかけていた育生は、注目ワードに上がつていた『レンタルファーム』というワードに惹かれた。そのワードをクリックすると、関連サイトがいくつか見つかる。

「貸し農園？ 土地を借りて野菜作りか？ どいつもこいつもどうかしてる」

花森市内にもひとつあるらしい。憎まれ口を叩きながらも、ふと思いついた。畑を借りてまで野菜を作る女性なら、愛情とまではいかななくても、野菜に興味はあるはずだ。

あてがないのだから、藁にだつてすがりたい。

ものは試しで、とにかくレンタルファームに行ってみようと思った。

翌月曜日。昼の休憩時間を使って、育生は初めてレンタルファームを訪れた。

サッカー場が作れそうなほど広々とした畑が広がり、平日なのに思ったよりもたくさんの方がいる。男性よりも女性が目立つ。畑を借りたがる人がこんなにいるとは、信じられなかった。

「金を払って畑を借りて、種を蒔いて、世話して野菜を作るわけか。やっぱりどうかしてる」
他人事とはいえ、揶揄したくなった。

育生の目的はいわゆるナンパだが、畑を借りもせずにはうろつくのは怪しすぎる。

仕方ない、小さな区画を借りるか。借りたら何か植えなきゃなるまい。野菜を作るなんて考えたこともない。できるのか？ 自分の正気を疑う言葉が口をつく。

「祖父の畑を手に入れるためにこの畑を借りるのか？ 僕も頭がやられてきたみたいだ」

だからといってほかに案も思いつかないので、畑の契約のためにスタッフを探した。『シーズ・イン・花森』とファーム名のロゴが入った、緑色のキャップとエプロンをした小柄な女性に目が留まったのは、彼女が桜の下にいたからだ。

桜はとつくに散っている頃なのに、ファームの建物の横にある桜だけはまだ花を残していた。その下に立ち、彼女はひどく驚いた様子で育生を見ている。羽織ったパーカーまで緑。全身がいわばピーマン色だ。舞い落ちる桜のせいでピーマン色が余計に目立ち、目を引いた。

嫌いなピーマンを連想させるのに、鮮やかないい色だと思う。

そして育生は、気がつくやと彼女に声をかけていた。

「このスタッフかい？」

ピーマンカラーの女性は「何のご用でしょうか」といかにも営業スマイルを見せた。「動くな」と言ったのは、きれいな光景を壊したくなかったからだ。自分らしくない、奇妙な感情だった。その直後に彼女と罵倒し合って、サインした契約まで破棄して出てきてしまうとは……。こうして運転している今でも、信じられない。

昼休憩はとつくに終わっている。なのに昼食もとれていないし、目的も達成できていない。

それもこれもあの――

「ピーマンガールめ！」

交差点で前の車が少ししか進まず、ブレーキを踏む。思うように進ませてくれない信号に、育生のイライラは頂点に達しようとしていた。

ファームに行った翌日。

出勤してからも、育生の怒りはまだくすぶっていた。ファームで出会った全身ピーマン色の女性が頭のなかにちらついて、集中できないのだ。

一八〇センチ近い育生に比べると、彼女は一六〇センチもなかっただろう。小柄で地味な娘に見えるのに、話してみればとんでもなかった。

『ピーマンの何がいけないっていうの!』

何が、と聞かれればすべてだ。

色も形も味も、いいところなんかひとつもない。

『ピーマンに罪はないわ!』

罪、ときた。冗談じゃないぞ、あの女。ピーマンはピーマンであること自体が罪なんだ。

奴に存在意義なんてあるものか。

ドンツと拳で机を叩いたら、熊谷が席から伸びをして育生を見た。

『どうしたんだ。昨日から荒れてるな』

「ほんと、ボスにしては珍しいわねえ」

椿にまでそう言われて、しまったと思う。

「いや、すみません、何でも」

八つ当たりするほど子どもではないつもりだが、昨日の午後から不機嫌さがにじみ出ていたらしい。ふたりが温厚な大人で助かった。狭い事務所で気を遣わせるなんて、まだまだ未熟だ。

自分でも、こんなに感情的になるのは珍しいと思う。昨日は勢いで行動したけれど、申し込みを破棄したことに悔いはない。

あんなレンタルファーム、二度と行くものか。

本心からそう思っていたのに、仕事のあとに一倉の祖父母のもとを訪れると、そうも言っていられなくなった。

リビングのテーブルにいた育生の前には、白い皿にのったピーマンの肉詰め。かなり大きく、すごい存在感だ。志乃がほぼえんで育生を見る。

困った。

「すみません、僕は」

「食べる」

向かいに座った伸之助の声色は、絶対服従を求める響きだ。

おまけにそこには、祖父母のほかにもうひとりいた。

「おばあさん、美味しいですよ」

「そう? よかったわ」

一倉柊は母の兄の子で、従弟にあたる。育生よりもふたつ下だと自己紹介した彼は、隣でにこやかにピーマンの肉詰めを食べて言う。

「また腕をあげたんじゃないですか」

張り合う必要はないが、手をつけられないのも気が引けた。ピーマンを食べられないわけではない。このタイミングでピーマンだなんて、呪われている気がするだけだ。

「いただきます」

「はいどうぞ」

ピーマンの肉詰めには、ピーマンガールの顔が重なった。このやろうと憎々しさを込め、ぐさつとフォークを刺す。ざつくりとナイフで切って、口に放りこんだ。

味を感じしても、気にせず吞み下すことはできる。長年の修練のたまものだ。

ピーマンを美味しいと言う奴の気は知れないが、育生とて他人の味覚までとやかく言うつもりはなかった。こっちの好き嫌いに文句をつけさえしなければ。なのに、あの女ときたら――

ついピーマンを噛みしめて、味を意識してしまった。

ピーマンに罪はないかと？ まずいじゃないか。この味が罪でないのなら、何なんだ。

「育生くん、ピーマン畑が欲しいんだって？」

従弟に問われて、ぎよつとした。

「ピーマン畑？」

「ああ、知らないの。神社の前の畑のことだよ。おじいさんは、あそこに必ずピーマンを作る

んだ」

驚いて伸之助を見るが、知らん顔をしている。

そりゃあ、尋ねもしなかったけれど。

「ピーマンって連作できないんだ。だから畑の一部にピーマンを植えて、ほかには別のものを作る。毎年植える場所を移しはしても、ピーマンは必ず」

「どうして？」

思わず、しかめ面で聞いた。

こうもピーマンにつきまとわれるとは、昨日も今日も厄日に違いない。

「わしの勝手じゃ。それよりも育生、二ヶ月だぞ」

いきなり言われて、何のことかと思つた。伸之助の顔を見つめ、意図を察してあわてる。

「二ヶ月って、あの条件のことですか？ 二ヶ月で相手を見つけると？」

「六月末じゃ。親族が毎年うちに集まる。そこに連れてきて、プロポーズし」

「プロポーズ？」

「伴侶にするならプロポーズじゃろう？」

早すぎる期限と容赦ない要求に、反論もできない。

じつと睨んだが、伸之助は涼しい顔だ。育生の望みを叶えるつもりはないのだろうか。柊がおもしろそうに育生と伸之助の顔を見比べて、聞く。

「六月末って一倉の集いのことでしょ。育生くん、結婚するの？」

「君には関係ない」

「そんなこと言わずにさ」

「柊さんたら」

志乃がたしなめても、柊は悪びれないでしつこく聞いてくる。そこに仲之助がだめ押しして、育生を困らせる。

「その場でプロポーズして、相手が逃げなかつたら認めよう。いいな」

よくはない。よくはないが、うなずくしかない。

「困ったおじいさんねえ？」

志乃は、困り顔でとりなそうとする。柊はおもしろがっていたが、育生はそれどころではない。自室に戻って、また頭を抱えた。

「二ヶ月で見つけるだって？ 野菜を愛する女性を？ どこにいるっていうんだ、教えてくれ」

誰に言うでもなくぼやいたら、驚いたことに答えが返ってきた。

（いるじゃないか。おまえを罵倒した、あのピーマンガールさ）

ぎよっとしてあたりを見回した。

誰もいるわけがない。答えたのは自分自身だ。

でもまさか――

「ピーマンガール？ あんなかんしゃく玉、ごめんだぞ」

（だったらどうする、時間も当てもないくせに）

現実を突きつけられ、育生は眉根を寄せた。自分と葛藤を続けながらも、切羽詰まった事情が怒りを凌駕りようがしていく。

そのとおりであった。時間もなければ当てもない。あの土地を手に入れるためには、些細ささいなプライドは捨てるしかない。

ピーマンガールか。

育生の頭は、ものすごい速さで回転していた。

ラウンド5

思うようにいかないのが人生の常とはいえ、こうもトラブルが続くと、妃菜だつてがっかりする。しかも自分の責任となると、逃げ場がない。

「畑仕事は好きよ。好きだけどね」

つぶやきながら鋤くわを置いた妃菜は、タオルで額の汗を拭ぬぐった。

園内は半分以上の区画が契約済みだが、すべてではない。

そこが問題だ。

たった今、畝うねを立てた小さな区画を、妃菜は見下ろした。五ヘクタール、畳三枚分の一番狭い区画は、あの百瀬が借りるはずだった畑だ。

彼と言いつ争つて二日経つ。今もまだ、歯ぎしりしたくなるほど腹が立っている。

百瀬が帰つたあと、チーフの秋葉は妃菜の体から水分がなくなるくらい絞り上げ、叱責した。

「お客様が何を植えようが、選ぶのはお客様です。ピーマンが嫌い？ それは何です？ 嫌いな野菜があるのは、彼だけだとも？」

「すみません」

「あの区画は狭すぎて希望者が少ないんです。わかっているでしょう」

「すみません」

「そこを希望された。しかもサポートまでつけて。絶好の契約だったのに、残念です。新しい希望者が現れなかったら」

「ほんとにすみません」

「いったい何を考えていたんですか？ ひどい損失ですよ、ほんとに」

あんなことを言ったのは、お説教中もガンガンとやまない頭痛のせいだったかもしれない。

「私が借ります」

「え？」

「あの区画、私が借ります。それでいいですよね」

秋葉チーフのねちっこいお説教に耐えられなくなったのもあるし、百瀬のためにこうまで責め立てられるのが悔しかったのもある。契約しても、彼は世話をしに来なかっただろうに。

「そりゃあサポートをつけるって言ったわよ。私の言い方もまずかったですけど」

思い出しながら、ざくつと鍬を土に立てた。自分が借りる畑だから、昼休みを返上して作業している。休んでいられないほど、自分に腹を立てているのだ。

確かに、百瀬と言いつ争つたのはまずかった。

自分の失敗を認めるのはつらいが、それは事実だ。妃菜にもわかっている。単なるバイトの自分が契約したお客様を怒らせ、追ひ払ってしまうなんて最悪だ。

「かんしゃくなんて滅多に起こさないのに。小学校以来？ 私はまだ小学生なの？ バカバカバカ」

自分がかつかりだ。いくらピーマンが妃菜の弱点でアキレス腱だからって、彼がそれを知るわけはない。第一、お客様にあんな言い方をすることは許されない。

だから、ここを借りるのは自分へのペナルティのつもりだ。予定外の大きな出費で、預金残高を思うと不安が募るけれど。大丈夫かな。

秋葉チーフもさすがに気にしたのか、もし希望者が現れば、そちらが優先だと言いつ足した。

でも、希望者はそういないはず。たいていの人はもう少し広い区画を望むから、当てにはできない。

「決めたんでしょ」

自分に言い聞かせ、鍬をもう一度ざくつくり入れる。久しぶりに野菜を育てるのも悪くない。お客様と同じ目線で仕事ができるし、実れば食費の節約にもなる。

妃菜は鍬を横に置き、両手を組んで目を閉じると、一心に念じた。

「神様、肝に銘じて反省します。だから、あの男に二度と会いませんように」
切実な祈りだったのに、神様が昼寝でもしていたのか、願いは届かなかった。
目を開けると、駐車場からこっちへ向かってくる彼が見える。
信じられない。幻じゃないの？

ジーンズとポロシャツ、新品のスニーカーという格好は、この間よりずっと畑にふさわしかった。
つい三日前に怒鳴り散らして帰ったことなど、忘れたようなさざわやかさだ。

しかし、妃菜の脳内には、SF有名映画のような不穏なメロディが流れる。

悪役登場のテーマ曲を背負って、目の前で立ち止まった彼は腕組みした。

「万屋くん、だったな」

「百瀬さま、でしたね」

「謝罪は」

「……は？」

「この間、僕に喧嘩を売った謝罪だ」

ありとあらゆる罵倒が口の中から飛び出しそうになる。何とか自制して押さえこんだつもりだったのに、口はまたしても妃菜を裏切った。

「先日はお客様に『喧嘩を売って』申し訳ありませんでした」

相手の目が閃くのを見て、自分の舌を噛み切りたくなった。

クビになったらどうするの！

今度こそ真剣にまじめに、心から頭を下げた。

「ごめんなさい！」

「本気に聞こえないな」

「本気です。ほんとうにすみませんでした！」

沈黙が続く。おそろおそろ頭を上げると、彼の表情は思ったほど怒っていないが、何を考えているのかはわからない。彼はじつと穴のあくほど妃菜を見つめ、にやっと笑った。

「じゃあ、誠意を示してもらおう」

「誠意？」

「畑を借りたい。内容は先日言ったとおりだ」

まさかと思った。まさかの大逆転ホームランだ。マジマジマジ？　ほんとに？

だが、喜ぶのは早そうだ。

「君にサポートしてほしい」

「私はバイトで、毎日来ているわけじゃないんですが」

「今日いるってことは水曜は来るんだろう？　僕も水曜がいい。週末は仕事なんだ」

「でもその、それだと通常のサポートでは」

「必要なら、割増料金でも別料金でも払う」

ファームにとっては願ってもない上客になりそうだ。断ることなど妃菜にはできない。
彼の肩越しに、こちらへすっとなでくる秋葉チーフの形相が見えたから、なおのこと。

あきらめた妃菜は、深々と頭を下げる。

「……承知しました。ご契約、ありがとうございます」

そこに、あわてふためいた秋葉チーフのうわずった声がかかった。

「おっ、お客様？　うちのバイトがまた何か？」

「気が変わった。申し込むことにしたよ」

「ご契約ですか？　ほんとに？　ほんとうに？　ありがとうございます！」

チーフの声は一転して、感激にうち震えている。

妃菜にしても、これで半年分の契約金を払わなくて済むのだ。ありがたい。なのに気持ちは上向かず、妙な疲れが襲^{おそ}ってくる。問題は解決したのではなく、継続しただけのように思える。

これからどうなるんだろう。

とびつきの愛想^{あいそ}笑いで、秋葉チーフが百瀬を案内していく。事務所に向かうふたりを追いかけるながら、妃菜はもう一度ため息をついた。

サポートについての彼の要望を聞いた秋葉チーフは、当惑^{まうわく}していた。

「まるで専属指導だね」

そうはいっても、たつぷり割増料金での契約になるのだから、断るはずがない。百瀬の手続きは滞^{とど}りなく完了した。しかし、先日の騒^{さわ}ぎは仮契約を済ませたあとだった。安心するのは早いと言いたげに、秋葉チーフが妃菜を見る。

妃菜はというと、さっそく百瀬に、苗付けの作業を丸投げされるものと覚悟^{かくご}していた。ところが彼は先日とは態度を変え、種^{しゅ}苗^{びょう}を積極的に選び始める。

「育てやすく失敗のない、なるべく早く実る野菜がいい。おすすめは何かな」

以前の『何でもいい』発言に比べて格段の進歩だったから、妃菜も同じ間違いをしないように心がけた。

「ラディッシュとナス、シシトウはいかがでしょう」

妃菜が提案したのは、さつき自分が植えるつもりで用意していた種と苗だった。シシトウでなくピーマンのつもりだったが、さすがにここでピーマンを持ち出すのは危険だ。

「緑と赤と紺で、実るとききれいですよ」

そう言われてもイメージできないのか、彼は曖昧^{あいまい}な表情を浮かべる。

「色はともかく、育てやすいのがいいな。どれくらいで収穫できるんだい」

「だいたい一ヶ月ですね」

「一ヶ月？　ずいぶん早いんだな、よし決まりだ」

口論も覚悟していたのに、あっさり受け入れられて拍子抜けした。むしろ、物足りない。

しかし妃菜は、畑で実際の作業指導になって、そんなもやもやした気持ちも晴らした。がっしりした体で腕力もありそうな百瀬だが、鋤^{くわ}を使うのは初めてらしく、へっぴり腰だ。

「おじちゃん、へたつぴー。お姉ちゃんのほうがじょーず」

めぐみ保育園の子どもたちが、妃菜の鬱憤^{うつげん}をさらに晴らしてくれる。怒るかと思っただが、百瀬は

意外に冷静だった。

「下手なのは認めよう。だが、おじちゃんと呼ぶのは認めない。おにいちゃんだ」

「おじーちゃん？」

「おいおい」

百瀬の畑の隣は、四つまとめてめぐみ保育園が借りている区画だった。子どもたちは自分たちの区画のみならず、そこら中を駆け回っている。百瀬のことを遊び相手というか、ちよっかいを出すのにお誂え向きだと目したようだ。

「だいたい、君らだつてまだ鍬は使えないだろう？ チビなんだから」

「チビじゃないよ、去年より三センチ伸びたもん」

「あたしは一センチ」

「おじちゃんは？」

「……大人になったら、背は伸びない」

子ども相手に、言い合いなんてするものじゃない。油断すると言い負かされ、調子に乗ってはやしたてられる。

「ゼロセンチ！ チビだー！」

「君らな」

「チビー」

「すみません。これ、あなたたち、やめなさいー！」

「きやーっ」

やっと気づいた先生に怒られても、子どもたちはむしろ嬉しそうに逃げていく。

百瀬の眉はよじれて輪っかが作れそうだが、子どもを嫌がらないのが意外だった。しゃべりもないで追い払うタイプかと思つたのに、肩をすくめただけで妃菜に向き直る。

「で、次は」

「ラディッシュの種を蒔きますから、畝に筋を一本つけて」

「何だつて種を蒔くの、筋をつけるんだ？」

彼の質問はお義理でもなければ、それきりでもなかった。種が雨で流れないようにするためだという妃菜の説明を聞いてラディッシュの種を蒔くと、質問を次々と投げかけてくる。

「土を盛る？ 盛るつてのは皿に料理をのせることじゃないのか？」

「こんな背の低い苗に何で支柱が必要なんだ？」

種蒔きに苗付け、畝作りに支柱立てまで。指示することに文句の形をした質問をぶつけてくるが、決して嫌がらせではなかった。妃菜の答えもちゃんと聞いて理解しているようだし、しゃべっている間も手は動かしている。

彼の手は、父を思い出させる大きな手だった。骨太の長い指が土にまみれると、うっとりしそうになる。そこでふと疑問が浮かんだ。

あんなに無関心そうだった畑に、わずか二日で興味津々になるなんて解せない。別人みたいだ。最初からこういう態度なら、ピーマン戦争が起きることはなかっただろうに。

「やけに積極的ですね」

いぶかしく思つて尋ねてみる。ナスの茎をひもで支柱に結んでいた彼が、手を止めて妃菜を見た。「農作業は嫌いなんだと思っていました」

「そうだな、自分でもびつくりだ」

ひとつを結び終わると、次の支柱に移る。

「やってみると結構楽しいよ。知らないことを知るのをおもしろい」

その答えを聞いてわかつた気がした。彼は子どもとそっくり、好奇心の塊だ。

だから子どもと対等なんだ。

「おもしろいが、疲れるのも確かだな」

三本目を結び終えて立ち上がった百瀬は、手についた土を払うとタオルで汗を拭つた。しゃがむと妃菜と同じくらいだった視線は、立つと遙かに上だ。憎らしい。

鍬に寄りかかつて周りを見回す。水やりしているカップルや、植え付けにはしゃぐ家族連れを、目でなぞる姿も絵になる。憎らしさ倍増だ。

「疲れるのに誰もが楽しそうだ。まだまだ僕には物好きにしか見えない」

「物好きの会によるこそ」

皮肉のつもりはなかった。野菜作りの喜びである収穫を知らなければ、そう思うのも不思議じゃない。使つた道具を片づける妃菜に、彼は尋ねてくる。

「やっぱり家族連れが多いのかい」

「そうですね」

「僕みたいにひとりには珍しいのかな。男性も女性も」

「平均すると決して少なくはないんですが、うちのファームでは今のところ、家族連れやカップルのほうが多いかもしれません」

チツと舌打ちが聞こえた気がした。驚いて彼を見るが、知らん顔だ。空耳だろうか？ 私、疲れたのかしら。疲れたんだわ。もう三時間も作業しているんだもの。

水を汲んでおいたじょうろを百瀬に差し出した。

「最後は水やりです。たっぷりやってください」

彼は植えた苗とじょうろを見比べて、戸惑っている。

「どのくらいかければいいんだ？」

「そうですね、ドボドボドボじゃなくて、シャワシャワシャワでたっぷりと。天気にも恵まれば、来週にはラディッシュが発芽しますよ」

「ほんとうに？」

彼は疑い深そうな顔をしていたが、じょうろを受け取って急におぼつかなくなつた。じょうろを傾けると勢いよく流れ出る水に驚き、あわてている。

「ドボドボドボじゃなくて？」

「シャワシャワシャワで」

「なるほど」

何とか優しく水を降らせようと、腰を入れている。
真剣な様子はやっぱり子どもみたいだ。可愛い。

……可愛い？

胸の奥がきゅつとつかまれた気がした。どうかしているわ、と自分を叱る。その反動で、わざとぶつきらぼうな言い方をした。

「週に一度は来てくださいね。雨でもファームはやってます。もし来られなければ、ご連絡を」
ちよんどう空からになつたじょうろを手にも、百瀬が妃菜を見た。

「来ると言ったらどう？ しつこいな」

「お願いします。畑のために」

「来ないと逮捕されるのか？」

「まじめに言ってるんですよ」

腹立たしさが声音にまじると、彼も腹立たしげな様子で妃菜にじょうろを押しつけた。

「来ると言ったら、来るさ。来なきゃならない」

さつきまでの平和な雰囲気が消える。心から畑が好きになつたわけじゃないのだろう。そうよね、そんな簡単に、人の気持ちは変わらないわ。

でも、彼が契約してくれたおかげで、妃菜はこの区画を借りなくて済んだ。その上、契約料金はオプシオンで通常よりも高額だ。会社としては上客に間違いはない。

文句を言うどころか感謝すべきだ。妃菜は自らを戒めてお辞儀する。

「心からお待ちしております」

「それがほんとなら、助かるんだが」

「は？」

何のことだと顔を上げたら、もう彼はこちらに背を向けていた。見送って、どっと疲れを感じる。

これから毎週、彼とこんなに大変な、ある意味、濃密な時間を過ごさなくてはならないのか。

すぐきつい。おまけに周りにいるスタッフや女性客の視線がチクチクと痛い。

「何だか、割に合わないわ」

その日は終業時間までが、かつてないほど長く感じられた。

ラウンド6

次の水曜日に百瀬がちゃんと来るかどうか、妃菜は半信半疑だった。

世間的にはゴールデンウィークの中なか日。見学者と、すでに契約を済ませた客でファームは人がいっぱいだ。新規契約の追いこみをかけるため、いつもよりスタッフが増員されている。

出勤した妃菜は、秋葉チーフにしつこいくらい念押しされた。

「いいね、百瀬さまがいらしたら、くれぐれも怒らせないように。間違っても、また契約破棄なんてことがないように、頼んだよ」